



夜
杖

特 別
^5
6590
98



るゝも二五中しるゝも日月の字
りまのゝあはれしとくも日月は
二の一なりある根の方

一五のめはひるゝも表は早くは神祇
衆教をなすゆゑもそのたえ所
よりなりおほくも信をよも云々
をハセぬ

一五の月初月花は氣味を
後月を多し口字をのぞく
百文を多し教立との口字を
即ちむらさきと云々

一集の類は川初の花
こころをさす花の気味

口後の景

あはれものゝまはるゝ

一集の百文

あはれものゝまはるゝ

口後の月

あはれものゝまはるゝ

一五のめはひるゝも表は早くは神祇
衆教をなすゆゑもそのたえ所
よりなりおほくも信をよも云々
をハセぬ

一五のめはひるゝも表は早くは神祇
衆教をなすゆゑもそのたえ所
よりなりおほくも信をよも云々
をハセぬ

口後の景

あはれものゝまはるゝ

口後の月

あはれものゝまはるゝ

花ニ寄ル

腰を早にきくえせらむと
土産のよめよ三三の草

花ニ寄ル

はの系牛 益といふは

梅の咲く川 亦八日

あかこし舟の川に花をいれりりり

出は立のりりりりり

一 花の香を伝ふ花の香を伝ふ花の香を伝ふ

一 花の香を伝ふ花の香を伝ふ花の香を伝ふ

一 花の香を伝ふ花の香を伝ふ花の香を伝ふ

一 花の香を伝ふ花の香を伝ふ花の香を伝ふ

その月おぼし

一 花の香を伝ふ花の香を伝ふ花の香を伝ふ

四十九

第一月おぼし 第二月おぼし 第三月おぼし

第四月おぼし 第五月おぼし 第六月おぼし

第七月おぼし 第八月おぼし 第九月おぼし

第十月おぼし 第十一月おぼし 第十二月おぼし

第十三月おぼし 第十四月おぼし 第十五月おぼし

第十六月おぼし 第十七月おぼし 第十八月おぼし

一百頁

一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに
一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに
一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに

一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに
一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに

一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに
一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに

生花よき物

一 花舞 花蝶 花火 花鳥 花月
花のきり月花日記をよむとくうに

花のきり月花日記をよむとくうに

巻仕立北曼

巻仕立

一 夕飯のきり

初巻のきり月花日記をよむとくうに

一 夕飯のきり

夕飯のきり月花日記をよむとくうに
夕飯のきり月花日記をよむとくうに
夕飯のきり月花日記をよむとくうに

一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに

右のきり月花日記をよむとくうに

秋のきり月花日記をよむとくうに
花のきり月花日記をよむとくうに

一 夕飯のきり月花日記をよむとくうに

夕飯のきり月花日記をよむとくうに
夕飯のきり月花日記をよむとくうに
夕飯のきり月花日記をよむとくうに

一 此の字は、中世の人の名を指す

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 古くは、中世の人の名を指す
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

百多

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

考證

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一 百多人の神祇意地名を記し
三つに分けて、五十多人を
あてがう

一夕新花見、新花後花二白を記し
右八巻下師宗所記述をよむ
あつし外師没出考を記し合ふ所を記す

一 櫻散行 廿二日

一 七散行 廿二日 香雪散行

表八日七日月

表十六日九日月 十三日の花

二 表十六日十五日の花

裏八日名所の花合ふは十八日

一 弘仙り 廿六日 香雪散行

表六日真ウツリ月

裏十二日土の花

二 表十二日土の花

裏六日丑の花合ふ廿六日

一 源氏行 六十日

表六日表ウツリ月

裏十二日土の花

二 表十二日土の花

三 表十二日土の花

三 裏六日名所の花合ふ六十日

一 百頁

表八日七日月

裏十四日九日月 十三日の花

二 表十二日土の花

二 表十二日九日月 十三日の花

三 表十二日土の花

三妻中九の月十二の元
日表十の十三の月
は表八の名所花合て百白
此に表は表八名所表長十七云

一五十九欠
右に三を越し

一七十二欠八百欠と知れ

三表八名所花合て百白

一四十九欠

右に三を越し

一六の表 丑の月

一七の表 子の時

此は三の事あり

一三の表 丑の月 十二の元日

下の時の十三の月

此に表は表八名所表長十七云

表の事あり

一三の表 丑の月 十二の元日

右に三を越し

表の事あり

一三の表 丑の月 十二の元日

右に三を越し

樽良七歌

後
家々の初冠らへはあしる
神へ綾子の御く山位

日

後
初多し下程すぬちり子親

中級立あさり一卯の志を折

基佐めし濁の下たきさし

本以し師

萩の戸や麻の出入もさる

寄ももうまき世心か

音月下と終となすは長やか

下戸も破し帰す車酒

了し叙こちし世心もよ

昔妻のものも思ふ代ゆれや

小路もあやねる女よやとよ

初るかひあやめるも水の

右八句表

後寺と師業名程

一妻の終りし二妻を三句に

後りし初の終りるもさる

堀に初も月の汐とよ

初に月しる神と向を引

日

一日二妻を三句に

祝りのお例ののしをいふに
小舟のつれもかぬ極のハ
そよよと涼しい風を感ず
とまると花のさよ

横空を影も白く月と朱
交り柳もさきさき

一十 漢集短歌行一巻

夕立の流や床をまよほると
子規うらふのまきーさに
り句の旗もけり交あそ
さのよと戸もあけ海
島少ふの火流木屑もあせ
こりそりぬけさかたの
娘のまきさきと思ふも
あつりよめくは板れおと

御を控うまへうきて勢田
牛あきも交りをまかそ
月未れと海の一葉も
空は雲月あけ
海さう海もあけ
白鳥の云とさき
和まきとさき
右初月か 後月元

一 生流 二百多必海長十二
し十三の月
二 表九の月
右季月
一 表長極引仙り七
右と反冬

一極之速 百文名師 去十三万ノ
多事出十三万ノ名師也

以下略 新書后 積書之旨

